

論文名：障害福祉施設通所知的障害者の口腔保健の支援に向けた実行機能と関連する歯磨き行動質問紙の検証（要約）

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 石黒明日香

ここから記入

【目的】

知的障害者は、その特性のために歯磨き行動が困難であり、口腔衛生状態に課題があること、日常生活上の適応行動をとるための実行機能に弱さがあることがこれまで報告されている。本研究のパイロットスタディでは、知的障害者の歯磨き行動に関連する実行機能を明らかにするため、独自の「実行機能と関連する歯磨き行動質問紙（以下、歯磨き行動質問紙）」を開発し、調査を行った。その結果、知的障害者には歯磨き行動に関連する実行機能に弱さがみられ、支援が必要であることが明らかになった。しかし、歯磨き行動質問紙の行動尺度としての検証はまだ行われていない。そこで、本研究は、知的障害者の口腔保健支援のため、歯磨き行動質問紙の有用性の検証を目的とした。併せて、「お口の健康とお手入れに関する質問紙」、Behavioral Assessment of the Dysexecutive Syndrome (BADS) の質問紙 Dysexecutive Questionnaire (DEX) と Executive Functions Questionnaire (EFQ) を用いて知的障害者と健常者の口腔保健行動と日常生活上の実行機能を比較し、知的障害者の口腔保健行動の改善支援方法を検討することを目的とした。

【対象・方法】

調査群として新潟市内の福祉施設 6 施設に通所する知的障害者 92 名、対照群として新潟県内の歯科医療関係者ではない健常者 70 名を対象とし、歯磨き行動質問紙、お口の健康とお手入れに関する質問紙、DEX および EFQ による調査を実施した。

歯磨き行動質問紙の因子妥当性の検証を、得られた回答結果の因子分析により行った。具体的には因子を抽出し、各因子に負荷を示した質問項目の内容に基づいて因子名を命名し、因子間相関を確認した。また、信頼性の検証のため、Cronbach α 係数による内的整合性および Spearman の順位相関係数で算出した I-T 相関による内的一貫性の確認を行い、判別的妥当性の検証のために Mann-Whitney 検定による群間比較を行った ($p < 0.05$)。

口腔の健康状態と保健行動については、お口の健康とお手入れに関する質問紙の各質問における χ^2 検定を実施し、群間比較を行った。実行機能については、DEX、EFQ の各質問の得点、構成要素の得点および質問紙全体の総合得点において Mann-Whitney 検定を実施し、群間比較を行った。

【結果・考察】

因子分析により、3 因子が抽出され、15 質問項目が選定された。各因子は、因子 1「歯磨き行動の計画的遂行」、因子 2「歯磨き行動の持続的遂行」、因子 3「歯磨き行動の開始・終了」と命名した。各因子間には、中等度の相関が認められた。各因子はいずれも歯磨き行動の一部に関する内容であることから、因子間に相関があることは妥当であり、歯磨き行

【別紙 2】

動質問紙が因子妥当性を有していると考えられた。各因子と質問紙全体の α 係数は 0.888～0.955 であり、I-T 相関は 0.509～0.959 といずれも中等度から高度の値であったことから、内的整合性と内の一貫性が示され、信頼性が検証された。さらに、因子 1、3 と質問紙全体の平均得点において群間の有意差が認められたことから、判別的妥当性が検証された。以上の結果から、知的障害者の歯磨き行動の評価ツールとしての歯磨き行動質問紙の有用性が検証された。

お口の健康とお手入れに関する質問紙の回答結果から、調査群の家族等の口腔保健に対する関心が高いことが明らかになり、結果的に調査群に望ましい保健行動を促していると考えられた。

また、DEX の分析結果では、「行動」、「認知」、「情動」、「その他」すべての構成要素で調査群の評価点が対照群より有意に低く、EFQ の分析結果では、6 構成要素のうち「プランニング」、「効率」、「切り替え」、「自己意識」の 4 構成要素の調査群の評価点が対照群より有意に低かった。これらの結果から、調査群は、行動を計画し、計画をもとに実行し、その行動を随時評価し、より適切な行動に切り替えていくことに弱さがあるものと推察される。

また、歯磨き行動質問紙による群間比較の結果、調査群は、「歯磨き行動の計画的遂行」と「歯磨き行動の開始・終了」の因子において弱さがみられた。これらの結果から、本研究の調査群は、歯磨きにとりかかり、磨き残しなく磨くこと、ひと通り磨いたら行動を終えることといった一連の歯磨き行動に弱さがあると考えられ、DEX や EFQ で明らかになった日常生活における実行機能の弱さが、歯磨き行動にも反映されていると考えられる。

歯磨き行動とそれに関連する実行機能について、調査群の弱い点が明らかになったことから、それらを補うため、歯磨きしたことをチェックするスケジュール表やブラッシング部位やストローク回数を明示するイラスト等、外的な補助ツールを用いた口腔保健支援を行う必要があると考えた。また、歯磨き行動質問紙により、知的障害者に対して特に支援が必要な因子を明らかにすることができたが、ブラッシング圧や毛先の当て方等の細かいブラッシング技術については、家族らの回答による評価が難しい。そのため、今後は歯科専門職が知的障害者の歯磨き行動を把握し、その結果に基づいて歯磨き指導を行うことができるよう、本質問紙を歯科健診や歯科保健指導用に発展させ、活用していくことが期待される。